

2020 RMGT カレンダーは、オリンピックイヤーで世界に注目される東京にスポットを当て、かつての江戸の町や、そこに住む人々の生活を、彩り豊かに描いた歌川広重の浮世絵「名所江戸百景」をテーマとしました。

※1
本カレンダーの制作にご協力いただいた東京伝統木版画工芸協同組合は、版元、絵師、彫師、摺師の技術と情熱の結晶である浮世絵を、江戸当時の色鮮やかさのままだに、現代に復刻再現しています。今回は同組合から、復刻版画を借用。原画をスキャニングして、浮世絵で使われている様々な表現や技法をオフセット印刷と後加工で再現しています。

企画制作・印刷：光村印刷株式会社

<浮世絵の表現を再現するために使った手法>

- ・木版畫の力強さを再現するため、本紙はプロセス4色に副版のスミを加えています。
- ・「ヒロシゲブルー」が特徴的な作品には特色の藍を追加しています。
- ・雲母を使ってきらめきを出した雲母摺り(きらずり)は、銀インキで再現しています。
- ・版に絵の具を付けずに圧だけを掛け立体感を出した空摺りは、後加工の空押し(エンボス)で再現しています。

※原画のサイズは340X220mmですが、カレンダーの紙面に合せて、120%に拡大して使用しています。



表紙

刷り順 : Bk→C→M→Y

紙面上部は、浮世絵に描かれた場所を、現在の東京の地図上に示したものです。



1-2月
浅草金龍山

刷り順 : Bk→C→M→Y→Bk(副版)
後加工 : 空押し(エンボス)で屋根に積もった雪の凹凸を再現。



3-4月
隅田川水神の森真崎

刷り順 : Bk→C→M→Y→Bk(副版)→藍



5-6月
水道橋駿河台

刷り順 : Bk→C→M→Y→Bk(副版)→藍→銀
鯉のぼりの表面のきらめきを銀インキで再現。



7-8月
市中繁栄七夕祭

刷り順 : Bk→C→M→Y→Bk(副版)→銀
富士山の山頂、家々の屋根のきらめきを銀インキで再現。



9-10月
猿わか町よるの景

刷り順 : Bk→C→M→Y→Bk(副版)→藍



11-12月
菱輪金杉三河しま

刷り順 : Bk→C→M→Y→Bk(副版)→藍
後加工 : 空押し(エンボス)で鶴の羽の立体的な模様を再現。

※1

歌川 広重(うたがわ ひろしげ) 1797年(寛政9年)生 - 1858年(安政5年)10月12日没

江戸時代の浮世絵師。かつては安藤広重(あんどう ひろしげ)とも呼ばれていましたが、安藤は本姓、広重は号であるため、現在は歌川広重と呼ばれています。

江戸の定火消しの安藤家に生まれ家督を継ぎ、その後に浮世絵師となり、風景を描いた木版画で人気を博しました。広重の作品は、ヨーロッパやアメリカでは、大胆な構図などとともに、青色、特に藍色の美しさで評価が高く「ヒロシゲブルー」と呼ばれます。「ヒロシゲブルー」はゴッホやモネなど印象派の画家や、アール・ヌーヴォーの芸術家らに影響を与えたとされ、当時ジャポニスムの流行を生んだ要因の一つともされています。

代表作は「東海道五十三次」、「名所江戸百景」

※2

「名所江戸百景」(めいしょえどひゃっけい)

歌川広重が1856年2月から1858年10月にかけて制作した浮世絵名所絵で、目録1枚と、119枚の図絵から成ります。広重最晩年の作品であり、最終的には完成せず、二代広重の補筆が加わって、「一立斎広重 一世一代 江戸百景」として刊行されました。

何気ない江戸の風景を、近景と遠景の極端な切り取り方や、ズームアップなどを駆使して、斬新な構図で描いています。また視覚的な面白さもさることながら、工夫を重ねた多版刷りの技術で、風景浮世絵としての完成度は随一とも言われています。その魅力は江戸の人々を魅了し、当時のベストセラーとなり、どの絵も1万から1万5千部の後摺りを要したほどでした。

※3

東京伝統木版画工芸協同組合

浮世絵木版画に代表される、日本独自の多色摺りの版画技術である「江戸木版画」を制作する組合です。

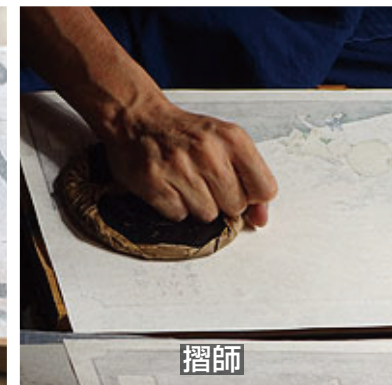
江戸木版画は、町人文化が花開いた江戸時代後期に、飛躍的に発展し、その技術は、200年もの間、今日まで東京を中心に継承されてきました。

江戸時代と変わらぬ技術・技法を継ぐ職人(彫師、摺師)、職人を束ねて作品をプロデュースする版元、江戸時代の手法を守り、材料や道具を制作する工房が一丸となり、その文化の継承と発展に力を注いでいます。

URL : <https://edohanga.jp/>



彫師



摺師